



NEWS

No. 172
September 2017

(公社) 日本工学アカデミー編集会議
Office : 〒 108-0014 東京都港区芝 5-26-20
建築会館 4F

Tel : 03-5442-0481
Fax : 03-5442-0485
E-mail : academy@ej.or.jp
URL : http://www.eaj.or.jp/



2017年春の会員の叙勲 瑞宝大綬章受章の梶山千里会員のご業績



九州大学大学院工学研究院応用化学部門教授 田中 敬二 / KEIJI TANAKA

本アカデミーの梶山千里顧問におかれましては、平成29年春の叙勲で瑞宝大綬章を受章されました。心よりお祝い申し上げます。

梶山先生は、昭和39年3月に九州大学工学部応用化学科をご卒業、昭和41年3月に同学大学院工学研究科修士課程応用化学専攻を修了されています。その後は渡米され、高分子科学・工学分野で世界最高峰のひとつ、マサチューセッツ大学大学院で高分子工学を専攻し、高分子物性の分野で昭和44年5月にPh.D.を取得されました。先生はマサチューセッツ大学高分子工学専攻の博士課程の第一号修了者です。その後、博士研究員を約1年経験された後、九州大学に戻られ、助手、助教授、教授を歴任されました。梶山先生は、九州大学教員として教育・研究、学会活動、国際活動、社会貢献等の幅広い分野でご活躍されました。平成12年4月から平成13年11月まで、大学院



工学研究院長として工学部の発展に寄与され、その後、第21代九州大学総長として九州芸術工科大学との統合、伊都へのキャンパス移転開始、国立大学法人化、さらに、九州大学百周年記念事業のスタート等、四大事業を推進され、九州大学の教育・研究と組織の改善・改革に貢献されてきました。

平成20年11月には独立行政法人日本学生支援機構理事長として勤務され、平成23年4月から公立大学法人福岡女子大学理事長・学長に就任され、現在に至っておられます。

ご研究では、高分子固体物性の構造論的研究を中心に、高分子材料や有機超薄膜の粘弾性緩和機構、高分子の疲労機構や高分子固体表面での分子運動特性、液晶複合膜の構造と物性の関係を解明するとともに、これらの知見に基づいた高分子材料の様々な機能化を展開されておられます。また、粘弾性追従型疲労試験機や走査型粘弾性顕微鏡などを、世界に先駆けて開発しておられます。近年は、自然科学と感性の融合を説かれ、積極的にアウトリーチ活動も行われております。このように梶山先生は、工学教育・研究だけでなく、組織のトップリーダー育成なども、その豊かな経験と高邁な識見に基づいて実行しておられます。

今後とも工学を志す学生、また、技術者、研究者に対してご指導を賜りますようどうぞ宜しくお願い申し上げます。

三春講演会および意見交換会



角山茂章副支部長



佐々木一男氏



大町仁志氏

北海道・東北支部主催の講演会が、平成 29 年 5 月 24 日（水）14 時 30 分より福島県環境創造センター（福島県三春町）を会場として開催された。参加者は、約 35 名。角山茂章副支部長の司会で、次の 3 件の講演があった。

まず、佐々木一男氏（福島県環境創造センター・研究部長）から同センターの紹介があった。環境の回復・創造に取り組むための調査研究及

び情報発信、教育等を行う総合的な拠点施設として福島県が設置し平成 28 年 7 月にグランドオープンした。引き続き、大町仁志氏（同センター・研究部主任研究員）から、「福島県内に生息する野生鳥獣の放射性セシウム濃度について」と題する講演があった。福島県では、平成 23 年より野生鳥獣放射能核種濃度モニタリングを続けている。イノシシ、ツキノワグマの筋肉中あるいは胃内容物や、ヤマドリ、キジといった野鳥の筋肉中に含まれるセシウム 137 濃度の経時変化の調査結果について紹介があった。

次に、飯島和毅氏（日本原子力研究開発機構福島環境安全センター・環境動態研究グループリーダー）による「放射能セシウムの動きを知り予測するー森林・ダム・河川を中心にー」と題した講演があった。雨等により生活圏に放射性セシウムが移動・堆積するかを調査したところ、放射性セシウムは森林表土にほとんどが滞留しており、地下水中の濃度もきわめて低い等の紹介があった。

最後に、大場真氏（国立環境研究所・地域創生研究室長）による「環境に配慮した地域創生研究～福島県新地町、三島町における例～」と題した講演があった。新地町に於ける自立分散型エネルギーシステムのデザイン研究結果、三島町に於ける木質バイオマスの活用研究やスマートコミュニティの研究面からの支援状況等について紹介があった。

講演会の最後には、阿部博之会長から挨拶と「過酷事故（重大事故）を二度と起こさないためにー東電福島第一の事故の教訓と風化（3 分冊）ー」の紹介があった。講演会終了後、三春町内で講師の皆さんを囲んでの懇親会を実施した。



飯島和毅氏



大場真氏



阿部博之会長

盛岡講演会および意見交換会

北海道・東北支部主催の講演会が、平成 29 年 7 月 21 日（金）15 時より岩手大学工学部 1 号館を会場に開催された。参加者は、約 15 名。船崎健一理事（岩手大学工学部長）の司会で、次の 2 件の講演があった。

まず、岩渕明氏（岩手大学長）による「岩手大学の目指す姿」と題した講演。岩手大学では、第 3 期中期目標（平成 28～33 年度）として次の 4 つを掲げている。(1)「Glocal な大学（Think globally, Act locally: 地域に根ざして世界に羽ばたく）」では、官民協働海外留学支援制度を利用した「トビタテ！留学 Japan 地域人材コース」として、海外研修（28 日以上 6 ヶ月以内）の前後に 10 日間の国内インターンシップを実施し地域のグローバル化に寄与。(2)「復興推進の継続（10 年間）」では、岩手大学三陸復興推進機構（平成 24 年 4 月～）を通じ総合的に支援を続ける中で、改組を実施。平成 28 年 4 月から工学部を理工学部へ変更。平成 29 年度には、修士課程を総合科学研究科（総合文化学専攻、地域創生専攻、理工学専攻、農学専攻）に統合予定。(3)「岩手大学としての Identity の涵養」では、同窓会

組織の強化、イーハトーブ基金等による外部資金の獲得。(4)「地域を先導する」では、平成 28 年度より三陸復興・地域創生推進機構を立ち上げ、イノベーションによる地域創生を目指す。

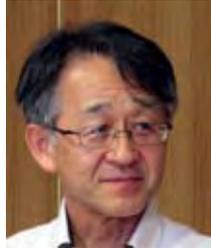
次は、越谷信氏（岩手大学地域防災研究センター・副センター長）による「岩手大学地域防災研究センターのこれまでの取り組み」と題した講演。平成 19 年 2 月にセンター設立。平成 24 年 4 月に全学組織として再出発。地域を限定した防災対策として、ボトムアップ型防災システム（三陸モデル）を構築した。

震災後には、マルチメディア防災教育 DVD 教材を開発。自治体職員を対象にした防災・危機管理エキスパート育成プログラムの実施等の紹介があった。

講演後、盛岡駅近くに会場を移し、両講師を囲んで懇談した。



講演会挨拶：
宮城光信副会長・支部長



船崎健一支部理事



岩淵明会員



越谷信氏



第 2 回 EAJ 中部レクチャー報告

中部支部幹事長 水谷 法美 / NORIMI MIZUTANI

昨年 11 月 23 日に発足した中部支部は、新しい年度を迎え、第 2 回の EAJ 中部レクチャーを 7 月 4 日（火）に豊橋技術科学大学附属図書館マルチプラザにて開催しました。本報はその報告をさせていただきます。

第 2 回中部レクチャーは、「ミニマルファブ리케이션と未来社会」をテーマに、国立研究開発法人産業技術総合研究所ナノエレクトロニクス研究部門主席研究員兼ミニマルシステムグループ長の原史朗氏から「産業が Individual になる超小型デバイス生産システム ミニマルファブ」と題した講演を、また、国立大学法人豊橋技術科学大学大学院電気電子情報工学専攻教授兼エレクトロニクス先端融合研究所長の澤田和明氏から「ミニマルファブで作る最先端センシングデバイス」と題した講演をいただいた後、二つの講演に関する討議を行いました。

まず、原史朗氏による講演では、原氏が生み出した革新的な半導体生産プロセスであるミニマルファブの思想と具体的な装置を、現在の半導体生産プロセスとの対比の中でお話いただき、従来のものとの違い、特にその強みについて非常に詳しく解説いただきました。併せてその可能性についてもお話いただき、如何に多くの企業、特に海外からも注目されているか、紹介いただきました。

また、澤田氏からは、現在の生産システムの中で見落とされている少量多品種のデバイスのニーズとその製品化の間のギャップの現状を、センシングデバイスをとりあげ解りやすく説明いただき、そのギャップをミニマルファブが非常に効率的かつ精度高く製品化できることを、例えばアルツハイマー予兆検出の可能性を秘めた高感度イオンイメージセンサー、地滑りを発生前の段階で検知することのできるセンサーや高齢化しつつある橋梁などのインフラの診断を行うセンサーなどの開発を紹介いただきながら講演いただきました。

半導体は日本の得意分野としてかつては世界的に優位な産業であったにもかかわらず、近年は隣国など後発の国



挨拶：
林良嗣理事・支部長



原史朗氏



澤田和明氏



懇親会挨拶：
原邦彦副支部長

が大きくシェアを伸ばしていますが、今回講演いただいたミニマルファブはまさに日本の強みとして他国ではまねのできない技術として非常に有望であることを示していただきました。

講演の後の討議では、日本の産業の将来が明るくなったなど非常に積極的な意見が出され、参加いただいた方からたくさん好評をいただきました。

その後、会場を同大学のひばりラウンジに移し、懇親会を開催しました。懇親会では講演会の際には時間が足らずに聞けなかった質問などもしていただきながら密度の濃い交流ができたのではないかと思います。あいにく台風3号の影響のもとでの開催となってしまう、懇親会は時間を短縮しての開催になりましたが、本部から田中秀雄常務理事・事務局長にも出席いただき、講演会では34名、また懇親会も24名の参加をいただきました。

最後になりますが、講師の方、参加者、ならびに第2回EAJ中部レクチャーを企画いただきました原邦彦副支部長はじめお手伝いいただきました豊橋技術科学大学の関係者の皆様に深甚なる感謝の意を表します。



SDGsにおける科学技術イノベーションの役割 第1回オープンフォーラム

SDGsにおける科学技術イノベーションの役割プロジェクトリーダー 武田 晴夫 / HARUO TAKEDA

先のEAJの総会でも紹介させて頂いたとおり、本年4月から2年間の予定で、EAJプロジェクト「SDGsにおける科学技術イノベーションの役割」を推進しています。SDGsは国連総会が全会一致で2015年9月に採択したもので、人類の持続的発展に向けて2030年までに達成すべき17のゴールと169のターゲットからなります。同プロジェクトでは約20名のプロジェクトメンバーによる活動に加え、プロジェクト



外からも広く参加をお願いするフォーラムを3回計画しています。その第1回を2017年7月21日に大阪大学吹田キャンパスで開催し、国際機関、政府機関、大学、民間企業から70人にご出席頂きました。

冒頭大阪大学の西尾章治郎総長より、SDGsの重要性和本プロジェクトへの期待のご挨拶を頂きました。続いてプロジェクトリーダーの(株)日立製作所武田晴夫技師長より、プロジェクト全体の進捗状況を報告させて頂きました。

その後、産業界の動向と事例を、都市開発業界につき大阪大学の土井健司教授、電機業界につきオムロン(株)貝崎勝部長、化学業界につき住友化学(株)河本光明部長、食品業界につき味の素(株)萩原定彦シニアマネージャ、金融業界につき日本経済調査協議会の杉浦哲郎専務理事からご講演頂きました。また科学技術振興機構(JST)の倉持隆雄研究開発戦略センター長代理から同機構の取り組みを紹介頂きました。

SDGs推進に向けての技術的鍵である指標化に関し、国連での指標化状況についてWHO(世界保健機関)の茅野龍馬テクニカルオフィサーよりヘルスケアを具体例に紹介頂きました。さらに指標化のための学会研究会の立ちあげの動きについて(株)野村総合研究所の小林孝明上級研究員より紹介頂きました。

総合討論では、本プロジェクトのサブリーダーである東京大学の藤田豊久教授、プロジェクトのメンバーである政策研究大学院大学の有本建男教授、大阪大学の小林傳司副学長なども交えて活発な討議がなされました。最後にEAJの本プロジェクト担当理事である科学技術振興機構(JST)の中村道治顧問より閉会のご挨拶をさせて頂きました。会議終了後も講演者を中心に熱心な議論が長く続き、今後のプロジェクトの推進にきわめて有効な機会となりました。



上段左より：西尾章治郎会員、武田晴夫リーダー、土井健司氏、貝崎勝氏、河本光明会員、荻原定彦氏、杉浦哲郎氏、倉持隆雄会員
下段左より：茅野龍馬氏、小林孝明氏、中村道治理事（講演順）



第 184 回 談話サロン「次世代コンピューティング技術」

企画推進グループリーダー 城石 芳博 / YOSHIHIRO SHIROISHI

本談話サロンは、新設の企画推進グループが、平成 29 年度に日本工学アカデミーとして開催すべき、講演・シンポジウム、フォーラム、談話サロンなどの候補テーマに関し、理事、主査、支部長、部会リーダー、プロジェクトリーダーの皆様を実施させて頂いたアンケート結果に基づき企画した、年間行事計画案をベースに開催する初の談話サロンで、平成 29 年 8 月 9 日（水）に御茶ノ水トライエッジカンファレンスで開催された。37.7℃の猛暑のなか、会員 18 名、非会員 19 名の計 37 名にご参加いただき、会場は参加者の関心の高さを反映して常に熱気に包まれていた。

司会は企画推進グループの小田俊理会員により行なわれた。まず、ムーアの法則とノイマン型コンピューティングが限界に近づき、AI/IoT の本格普及、持続可能社会（SDGs）実現に向け、米欧中では戦略的研究開発が始まっていると言う本談話サロンの背景と、革新的コンピューティング技術への期待について金山敏彦会員からご挨拶いただいた。次いで木村康則会員から、わが国がその強み（材料・デバイス技術や、自動車・ロボットなどの応用システム）を活かし、先頭集団の位置を確保し、世界に先駆けて Society 5.0 を実現するために必要な、産学官の役割、注力すべき分野・目標設定、研究開発課題とその打開策、事業モデル・産業政策、イノベーションエコシステム、人材育成の在り方などについて講演があった。坂田東一会員、福永泰会員、伊藤智氏、松井俊浩氏から、大型計算機、顧客に向けたアプリケーションへの挑戦の在り方、AI プロセッサアーキテクチャ、専門家による議論の重要性などの問題提起があり、時間を超過して白熱した議論が行われた。

短い休憩をはさみ、木村康則会員がモデレータとなり、中村宏教授（東京大学）、黒田忠広教授（慶應義塾大学）、馬路徹氏（NVIDIA）、丸山宏氏（Preferred Networks）、内山邦男氏（日立）をパネリストとするパネル討論が行なわれた。各氏からそれぞれ、日本の強い技術を生かすヒント、コンピュータ・AI・IC の展望、エッジ・ヘビーコンピューティングとセキュリティ、GPU（Graphics Processing Unit）を AI/ コンピューティングに活用した日本の強いモノづくりの可能性、Rebooting Computing 時代のアクセラレータの重要性などについて、それぞれの視点での意見が述べられ、一方参加者からは多様な観点での質疑があり、白熱した討議が行なわれた。

続いて、長瀬公一会員の司会で、23 名のご参加を戴いた懇親会が開催された。横山直樹会員の乾杯の音頭で始まった懇親会は、講演会、パネルディスカッションの熱気が引き継がれ、予定を大幅に超過して熱い意見交換となった。最後に城石芳博会員から皆様への御礼と、日本の強みを活かすべく、本テーマのプロジェクト化への期待が述べられ、最後に木村康則会員のこだわりの締めで閉会となった。



木村康則会員





叙勲記念パーティーでの
川崎顧問

川崎雅弘顧問は去る2017年7月3日に80歳で亡くなりました。川崎顧問は1959年に福井大学学芸学部を卒業され、直ちに当時の通商産業省に入省されました。以後各部署を歴任され、1970年からは在独日本大使館一等書記官、その後科学技術庁に転任され、計画局計画課長、官房審議官（研究調整局担当）、研究開発局長を歴任されました。1988年からは資源調査所を改組して新設された科学技術政策研究所の初代所長として退官までの3年間、政策研究をリードされました。

EAJには、新技術事業団の専務理事をしておられた1992年に入会され、以後理事を三回も務められたほか、数々の委員会等の委員長、委員として活躍されました。特に政策委員会の委員長を1994年度から5年間の長きにわたって務められた記録はまだ破られていません。2006年度から2009年度半ばまで、二回目の理事の時には副会長に選任され、当時の企画委員長として正会員会費の改訂を決断・進言されたことが強く印象に残っています。また、EAJが全米工学アカデミー（NAE）、科学技術振興事業団（JST；現在の科学技術振興機構）と共同で2000年に第1回日米先端工学（JAFOE）シンポジウムを実施した際には、JSTの第二代目理事長として多大なご尽力をいただきました。このシンポジウムは、EAJの主要な人材育成・国際協力事業として今も続いています。

ご経歴からも分かりますが、私の知る限りでも川崎顧問は特に秀でたテクノクラートの一人でした。同氏が上記政策、企画両委員会の委員長のと看、凶らずも私は委員の一人として在席しており、委員会での論議を通じて、その広汎な知識と的確な判断力に大いに啓発されたことを思い出します。これからも困難な課題について貴重なご意見を頂きたい人財であったので、この度逝去されたことは誠に残念でなりません。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

新入正会員のご紹介

(2017年5月入会者)

[第1分野]

いなば よしはる
稲葉 善治



ファナック（株）代表取締役会長兼 CEO

1948年生まれ。東京工業大学工学部機械工学科卒業後、同年いすゞ自動車（株）入社。同社にて生産技術に携わり、1983年ファナック（株）入社。1999年電動サーボ式射出成形機に関する研究で、東京大学工学博士号取得。2003年同社代表取締役社長就任、2016年より代表取締役会長兼 CEO。現在は日本ロボット工業会会長、日本工作機械工業会（日工会）副会長を務める。

かとう ちさち
加藤 千幸



東京大学生産技術研究所革新的シミュレーション研究センターセンター長・教授

1959年生まれ。1984年東京大学大学院工学系研究科機械工学専攻修了、（株）日立製作所機械研究所入社。博士（工学）。1999年東京大学生産技術研究所助教授を経て、2003年より現職。機械工学、特に、自動車や船、風車などの周りの流れや流れから発生する音の数値計算を専門としている。

かわはら げんた
河原 源太



大阪大学大学院基礎工学研究科教授

1987年大阪大学基礎工学部卒業、1989年大阪大学大学院基礎工学研究科博士前期課程修了、1994年博士（工学）取得。愛媛大学助手、助教授、京都大学助教授を経て、2005年より現職。専門は熱流体力学、特に乱流遷移や発達乱流の解明および制御。

なかたに たけし
中谷 武志



国立研究開発法人海洋研究開発機構技術研究員

1981年兵庫県生まれ。工学博士（東京大学）。専門は海中ロボット。特に自律型海中ロボット（AUV）のナビゲーションに関する研究。現在、世界コンペ Ocean Discovery XPRIZE に参戦中の日本チーム Team KUROSHIO にてリーダーを務める。

ふくやま まゆみ
福山 満由美



（株）日立製作所研究開発グループ技術戦略室技術統括センタ長・CIO

1987年京都大学理学部地球物理学科卒業、（株）日立製作所入社。同社機械研究所で電力・産業機器の耐震・振動関連の研究開発に従事。2014年機械研究センター長を経て2015年より現職。博士（工学）。

【第2分野】

あらかわ やすひこ
荒川 泰彦



東京大学生産技術研究所教授

1952年愛知県生まれ。1980年東京大学大学院工学系研究科修了。工学博士。1980年東京大学生産技術研究所講師、1981年同助教授を経て、1993年より現職。量子ドットを中心とした光電子工学の研究に従事。21/22期日本学術会議会員、全米工学アカデミー外国人会員。

いわもと としお
岩本 敏男



（株）NTTデータ代表取締役社長

1953年長野県生まれ。1976年東京大学工学部精密工学科卒業、日本電信電話公社入社。（1988年NTTデータ通信（株）へ移行、1998年（株）NTTデータへ社名変更。）2009年代表取締役副社長執行役員、2012年代表取締役社長（現職）。日本銀行システムや、保険共同システム、証券取引所システムなど、数多くの大規模システムを構築。著書：「IT幸福論」など。

おだ しゅんり
小田 俊理



東京工業大学教授

1951年生まれ。1979年東京工業大学大学院総合理工学研究科博士課程修了、工学博士。東京工業大学助手、助教授を経て1995年より現職。専門は、半導体デバイス。特にシリコン系半導体量子ドット・ナノワイヤの作製と応用に関する研究。IEEE Fellow、応用物理学会フェロー。

かわすみ みきこ
川澄 未来子



名城大学准教授

名古屋市生まれ。東京工業大学大学院総合理工学研究科修了。博士（工学）。1988年豊田中央研究所入社。愛知淑徳大学教授を経て、2011年より現職。専門は感性工学、色彩工学。タイでの教育・研究活動にも注力。2016年より日本色彩学会東海支部長。

みつれがわ まさる
喜連川 優



情報・システム研究機構国立情報学研究所所長、東京大学生産技術研究所教授

大阪府生まれ。1983年東京大学工学系研究科博士課程修了。工学博士。講師、助教授を経て東京大学生産技術研究所教授。東京大学地球観測データ統融合連携研究機構長（2010-2014）。2013年より国立情報学研究所所長。第27代情報処理学会会長（2013-14）。学術会議情報学委員会委員長（2014-17）。専門はデータベース工学。

きむら やすのり
木村 康則



(株) 富士通研究所フェロー

1956年山口県生まれ。1981年東京工業大学大学院修士課程修了。同年富士通(株)入社。富士通研究所においてコンピュータアーキテクチャ等の研究開発に従事。2009年～2015年米国富士通研究所駐在。2017年1月より国立研究開発法人科学技術振興機構研究開発戦略センター上席フェロー。この間、スタンフォード大学客員研究員、東京大学客員教授、九州大学客員教授等を歴任。博士(工学)。

さとう よしあき
佐藤 良明



日本電信電話(株) 先端技術総合研究所所長

1962年東京都生まれ。日本大学理工学研究科修了。工学博士。1987年NTTに入社。NTT基幹ネットワークの研究開発、NTTグループの新事業企画、映像コミュニケーションやサイネージのビジネス化、NTT研究所のR&Dマネジメントに従事。

せきたに つよし
関谷 毅



大阪大学名誉教授・大阪大学産業科学研究所教授

1977年生まれ。2003年東京大学大学院工学系研究科博士課程修了、博士(工学)。同年東京大学大学院工学系研究科助手、2007年同助教、2010年同講師、2011年同准教授。2014年大阪大学産業科学研究所教授。2014年トムソン・ロイター“Highly Cited Researchers 高被引用研究者(世界で影響力を持つ科学者)”選出。2015年文部科学大臣若手科学者賞受賞。2016年日本学術振興会賞受賞。2016年日経ビジネス「次代を創る100人」選出。2017年大阪大学名誉教授称号授与。

にしお しょうじろう
西尾 章治郎



大阪大学総長

1951年岐阜県生まれ。1980年京都大学大学院工学研究科博士課程修了。工学博士。京都大学助手、大阪大学助教授、教授を経て2015年より現職。この間、大阪大学サイバーメディアセンター長、同大学院情報科学研究科長、同理事・副学長等を歴任。2017年から情報処理学会会長。専門はデータ工学。

はしもと あきひろ
橋本 明弘



福井大学学術研究院工学系部門工学領域(電気・電子工学講座)教授・評議員

1957年大阪府生まれ。1981年北海道大学理学部物理学卒業。1983年北海道大学大学院工学研究科博士前期課程応用物理学専攻修了。1983年沖電気工業株式会社入社。1989年光技術研究開発株式会社つくば研究所出向。1991年工学博士。1992年福井大学工学部電子工学科助教授。2012年国立大学法人福井大学大学院工学研究科教授。2016年より現職。専門は結晶工学・半導体工学。

[第3分野]

あさみ まさひろ
浅見 正弘



富士フイルム(株)フェロー

1956年東京都生まれ。1980年東京大学大学院理学系研究科化学専攻修士課程修了。富士写真フイルム(株)入社、写真感光材料研究に従事、知的財産本部長、先端コア技術研究所長、R&D統括本部長、等を経て2016年より現職。専門は無機化学、材料科学。産学連携の立場から貢献していけるよう努力いたします。

いなぎ まさゆき
稲垣 昌幸



住友ベークライト(株)取締役専務執行役員

1959年静岡県生まれ。静岡大学卒業後住友ベークライト(株)入社。日本および中国の工場長、関係会社社長、エンジニアリングセンター長等を経て、2017年より現職。専門は化学工学と高分子化学。2015-2016年には(公社)化学工学会人材育成センター長を経験。

かけした ともゆき
掛下 知行



大阪大学大学院工学研究科（マテリアル生産科学専攻）教授

1952年北海道札幌市生まれ。1976年北海道大学大学院理学研究科物理学専攻を修了後、2000年に大阪大学教授に就任し、2011年に大阪大学大学院工学研究科長・工学部長に就任した後、2015年8月に離任し、現在に至っている。2013年に日本金属学会会長を、また、2014年に八大学工学系連合会の会長を務めた。専門は材料科学。理学博士。

かなや ゆうごう
金谷 有剛



国立研究開発法人海洋研究開発機構地球表層物質循環研究分野分野長代理

1973年札幌市生まれ。2000年東京大学大学院理学系研究科化学専攻博士課程修了。博士（理学）。同年海洋科学技術センター（2004年より海洋研究開発機構）研究員、2014年分野長代理。大気化学、地球環境物質科学、光学手法に基づく装置開発。

さかきばら さだゆき
榊原 定征



東レ（株）相談役、日本経済団体連合会 会長

1943年神奈川県生まれ。1967年名古屋大学大学院工学研究科（応用化学専攻）修士課程修了、東洋レーヨン（現東レ）入社。同社社長（2002年）、会長（2010年）を歴任し、2014年第13代日本経団連会長に就任。経済財政諮問会議等多数の政府会合の民間議員を務める。

しばた なおき
柴田 直樹



日機装技研（株）取締役副社長

1959年岐阜県生まれ。1983年東京工業大学総合理工学研究科博士課程修了。工学博士。豊田合成にて、GaN系半導体を用いた青色白色LEDの技術・製品開発を行う。オプトE事業部副事業部長を経て、現職。GaN系深紫外線LEDを用いたパッケージ・モジュールの技術・製品開発と事業立上げに従事。

たなか としひろ
田中 敏宏



大阪大学大学院工学研究科長・工学部長・教授

1957年兵庫県生まれ。1985年大阪大学大学院工学研究科博士後期課程修了、工学博士。大阪大学助手、助教授を経て、2002年工学研究科・教授に就任。2015年より現職。合金や酸化物について材料製造・加工プロセスに関する基礎物性の測定・推算が研究対象。

つかはら やすのり
塚原 保徳



マイクロ波化学（株）取締役CSO

1974年静岡県生まれ。2004年大阪大学大学院理学研究科修了、博士（理学）。2004年大阪大学大学院工学研究科特任研究員、2006年より同工学研究科特任准教授、2011年よりマイクロ波化学（株）取締役CSO（大阪大学と兼業）。専門は、マイクロ波化学、無機化学、光化学。

ながせ きみかず
長瀬 公一



東レ（株）主席部員

1953年生まれ。1978年東京大学理学系大学院修士課程修了（化学）。東レでは、感光性印刷版、電子写真用トナーの研究、開発、現在は研究企画、渉外担当。日本化学会理事（2007、2008）、科学技術学術審議会人材委員会委員（2013～16）。EAJでは科学技術政策、人材育成等で貢献できたとします。

なかたに かずひこ
中谷 和彦



大阪大学産業科学研究所教授

1959年奈良県生まれ。1988年大阪市立大学大学院博士課程修了（理学博士）。米国コロンビア大学化学科研究員、(財)相模中央化学研究所博士研究員、大阪市立大学助手、京都大学工学研究科助手、助教授を経て、2005年大阪大学産業科学研究所教授。大阪大学財務室室員、理事補佐、産研副所長を経て、2015年8月より所長。専門は有機化学、遺伝子科学。現在の研究テーマは「RNAを標的とした創薬研究の基盤づくり」。

まえ かずひろ
前 一廣



京都大学大学院工学研究科（化学工学専攻）教授

1957年大阪市生まれ、1982年京都大学大学院工学研究科修了。（株）神戸製鋼研究員を経て1986年京都大学工学部助手。博士学位取得後、助教授を経て2001年より現職。2008～2010年教育研究評議員。2014、2015年（公社）化学工学会会長。専門は化学工学、反応工学。

[第4分野]

かつみ たけし
勝見 武



京都大学大学院地球環境学堂教授

1967年京都府生まれ。京都大学工学部土木工学科1989年卒業、1991年修士課程修了、1997年博士（工学）。京都大学防災研究所助手、立命館大学理工学部助教授、京都大学地球環境学堂助教授・准教授を経て、2009年より現職。専門は地盤工学・地盤環境工学。

こばやし きよし
小林 潔司



京都大学経営管理大学院教授

土木工学と経済・経営学を基盤とする京都大学管理大学院の設立に努力するとともに大学院長として産学連携の推進、組織運営に貢献した。現在は、土木学会次期会長、グローバルビジネス学会理事長として学会運営に貢献している。専門は土木計画学。姫路生まれ。

たかはし よしかず
高橋 良和



京都大学大学院工学研究科教授

1970年京都市生まれ。1996年京都大学大学院工学研究科修了。博士（工学）。京都大学工学研究科助手、同大学防災研究所准教授、同大学工学研究科准教授を経て、2017年より現職。2011年より日本学術会議特任連携会員として若手アカデミーを立ち上げ、2014年より日本学術会議連携会員。専門は土木工学・耐震工学。

たから かおる
寶 馨



京都大学総合生存学館学館長

1957年彦根市生まれ。1979年京都大学工学部卒業。工学博士。1998年より防災研究所教授、2015年～2017年防災研究所長。2017年4月より現職。専門は水文学、水資源工学、極値統計理論。日本自然災害学会会長、水文・水資源学会副会長。

なかがわ はじめ
中川 一



京都大学防災研究所所長・教授

洪水、高潮、津波、土石流、泥石流、斜面崩壊などによる災害現象の解明と水災害の防止・軽減に関する研究を行っている。最近、生態系に配慮した河川再生と保全、河川堤防決壊のメカニズムと対策等の研究を行っている。京都府城陽市生まれ。

[第5分野]

からさき たかし
唐崎 隆史



日本工営（株）専務執行役員電力事業本部担当

1952年埼玉県生まれ。1977年東京大学大学院修士課程修了（電気）。同年東京電力（株）入社、地中送電など主に流通設備系業務に従事。その後、上野支社長、理事 ロンドン事務所長、執行役員 栃木支店長、常任監査役を経て、2012年より日本工営（株）へ入社。翌年より現職。

[第6分野]

おがわ てつお
小川 哲生



大阪大学理事・副学長

1962年岡山県玉野市生まれ。1988年東京大学大学院工学系研究科物理工学専攻博士課程中退。同年、東京大学助手。工学博士。日本電信電話株式会社基礎研究所研究員、大阪市立大学助教授、東北大学助教授を経て、2000年大阪大学教授。2015年より現職。専門は凝縮系の理論物理学、非平衡統計力学、量子光学。現在は、財務面やガバナンス面からの国立大学法人の経営改革に腐心しています。

こだま りょうすけ
兒玉 了祐



大阪大学レーザー科学研究所所長・教授

1961年広島県生まれ、パワーレーザーからレーザー粒子加速器などの開発、超高圧物質材料科学、レーザー核融合科学、レーザー宇宙物理学、量子真空物理学などパワーレーザーをつかった極限状態の科学に関する研究に従事。一連の研究を通じて「プラズマフォトンクス」という独自の概念を提唱。

[第7分野]

おのみち かずや
尾道 一哉



味の素（株）常務執行役員

1984年東京大学大学院農学系研究科修士課程修了。同年味の素（株）入社。研究所、医薬事業（開発、英国現地法人副社長、経営戦略）、人事部、研究所長、執行役員を経て、2013年常務執行役員研究開発企画部長、2017年同イノベーション研究所長。農学博士（東京大学）。経営学修士（Cass Business School, City, University of London）。

はっとり しゅんじ
服部 俊治



（株）ニッピバイオマトリックス研究所所長

1955年岐阜県美濃市出身。1985年東京医科歯科大学医学研究科修了。博士（医学）。同大学難治疾患研究所助手。1989年株式会社ニッピ入社、2008年より現職。専門はコラーゲンをはじめとした細胞外マトリックスタンパク質研究、およびその再生医療への応用。そのほか、東京農工大学客員教授、一般財団法人日本皮革研究所所長。

やぎ たかし
八木 隆



敷島スターチ（株）代表取締役社長

東京都出身。1980年東京農工大学農学部農芸化学科卒業。昭和産業株式会社にて食品分野の研究開発に携わる。工学博士（広島大学）。伊藤忠商事株式会社出向、品質保証部長、総合研究所長、取締役常務執行役員研究開発部門統轄を経て、2017年4月より現職。

終身会員

（2017年1月1日～7月31日になられた方）

木村 茂行

※終身会員制について、詳しくは次の URL をご参照ください。 <https://www.eaj.or.jp/?name=keisai>

伊原 義徳会員 2017年7月11日逝去 93歳 元科学技術事務次官 元日本原子力研究所理事長	1947年9月 東京工業大学電気工学科卒業 1947年9月 商工省機械局入省 1956年5月 科学技術庁原子力局入庁 1977年7月 科学技術事務次官 1986年8月 日本原子力研究所理事長 1987年4月 EAJ 入会
--	---

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

Pekka Linko 客員会員 2015年11月14日逝去 85歳 ヘルシンキ工科大学名誉教授	1996年7月 EAJ 客員会員
--	------------------

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

Erich Bloch 客員会員 2016年11月25日逝去 91歳 元全米科学財団 (NSF) 理事長	1980年 全米工学アカデミー (NAE) 会員 1995年7月 EAJ 客員会員
--	--

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

Mildred S. Dresselhaus 客員会員 2017年2月20日逝去 86歳 元マサチューセッツ工科大学教授	1974年 全米工学アカデミー (NAE) 会員 1993年11月 EAJ 客員会員
--	---

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

Roland W. Schmitt 客員会員 2017年3月31日逝去 93歳 レンセラー工科大学名誉学長	1978年 全米工学アカデミー (NAE) 会員 1991年3月 EAJ 客員会員
---	--

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

編集後記

3月の企画・運営委員会で、外国誌からも指摘される日本の科学技術活動の劣化を踏まえ、独立した個人から構成されるユニークな組織形態を持つ当アカデミーは率先して関係機関に対し、わが国が今、何をなすべきなのかということについて会員の総意を伝えるべきであるとのことになった。そこで提言作成のための作業を急速に進め、5月の理事会で「緊急提言—わが国の工学と科学技術力の凋落をくい止めるために」について了承をえた。内容は前号でお知らせしたとおり、ポイントを絞ったものとした。完成後、阿部会長とともに関係大臣や事務次官、与党の要職にある国会議員などを直接訪問し、提言の趣旨を伝えたと、大変肯定的な反応を得た。問題は、どこでもまず、EAJ とは何かを会長が初めに説明しなければならないことであった。「いつもご苦労さまです。今度の提言は何でしょうか？」と先方から聞かれるような関係を早く構築したいと思っています。

(専務理事 永野 博)